

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	蔭木 原洋
2. 審査委員	主査：(兵庫教育大学教授) 森田 猛 副主査：(上越教育大学教授) 下里俊行 委員：(上越教育大学特任教授) 浅倉有子 委員：(兵庫教育大学教授) 山内敏男 委員：(兵庫教育大学教授) 吉水裕也
3. 論文題目 海域史から見た17世紀台湾—オランダ東インド会社、鄭一族を通して—	
<p>4. 審査結果の要旨</p> <p>教科教育実践学専攻社会系教育連合講座 蔭木原洋から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和6年2月2日(金) 11時00分～11時30分 場 所：Zoom会議によるオンライン開催</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 明末の海商ハンブアン—タイオワンでの「出会い貿易」を通して 17世紀において、海禁政策をとる明朝中国の生糸と鎖国政策をとる日本の銀は、需要の高い世界商品であった。生糸の調達源を握る福建華人の海商・鄭芝龍と、日本銀の独占貿易権をもつオランダ東インド会社(VOC)を仲介し、第三国における中継貿易「出会い貿易」によって結びつけたのが、福建華人海商ハンブアンであり、その場所として選ばれたのが、明朝の支配の及ばない「化外の地」台湾島の都市タイオワンであったことを分析している。</p> <p>第2章 17世紀タイオワンでの「出会い貿易」の繁栄とその終焉 タイオワンにおける出会い貿易が、莫大な富をもたらす大きな取引であり、鄭芝龍がそこで得た資金をもとに東南アジア海域にまで貿易圏を広げたこと、出会い貿易の規模が想定外に大きすぎたために、VOCが深刻な現銀不足に陥ったことを指摘している。</p> <p>第3章 VOCによる台湾統治 VOCは出会い貿易と同時期に農地開拓など台湾島の植民地開拓に乗り出したが、それは貿易や要塞ゼーランディア城の修復費のために生じた現銀不足を補うものであり、計画的な事業ではなく、対処法的な諸方策の集積であったことを論じている。</p> <p>第4章 「鄭芝龍海上王国」 鄭芝龍は、中国生糸と日本銀の貿易による莫大な富を資金源に、東アジアから東南アジア海域の貿易港を結ぶ福建華人ネットワークを掌握し、強大な海軍力を背景に、この海域における渡航免除を独自に発行するにいたった。申請者は、ここに危険と富の海域に秩序と安全をもたらす「鄭芝龍海上王国」が建設されたことを論じている。</p> <p>第5章 「鄭芝龍海上王国」から「国性爺海上王国」へ 鄭芝龍から「海上王国」を継承した長子鄭成功(国性爺)は、数々の布告文によって「海上王国」の存在を明文化したが、それが福建華人ネットワークとの緊張関係に悩む国性爺がとった権威による支配の方策であり、彼の巧みな支配戦略であったことを論じている。</p>	

第6章 「国性爺海上王国」と台湾侵攻

「復明抗清」を掲げた国性爺の台湾侵攻が、実は海上王国の経済基盤強化のために行われたものであり、国性爺個人の決断であるよりも、福建華人ネットワークの利害が絡んだ複雑な事業であったことを実証的に解明している。

2. 審査経過

審査員5名は、提出された学位論文を精読したのち、令和6年2月2日にオンライン公聴会を実施し、引き続き学位論文の審査と学力確認を行った。

(1) 論文の独創性

本研究は、中国正史にほとんど登場しない海商の活動に着目し、海域史という新視点から、この時代と地域をとらえ、その立場から17世紀台湾の歴史的意義を考察した点に顕著な独創性がある。ヨーロッパの「17世紀危機」、明朝の海禁政策、江戸幕府の鎖国政策などから、17世紀は交易不振の時代とみなされてきたが、本研究はそれとは異なる17世紀像を提示している点でも独創的である。また、「海上王国」の存立を措定し、この海域で起きた諸事象をひとつの全体像に統合・分析したことも評価される。その観点から、VOCの台湾統治の目的や、ハンブアンや鄭芝龍の歴史的評価において、先行研究の不足点を克服することに貢献している。なかでも、オランダ支配から台湾を解放し、明朝復活をめざした英傑という従来の鄭成功(国性爺)像に大きな修正を求めている点は、特筆すべきであろう。

(2) 論文の発展性

本研究が採用した海域から歴史を捉える海域史研究は、近年になって注目される研究領域であり、今後、他の時代や地域においても適用される点で大いに発展性が期待される。また、大航海時代の世界商品として砂糖や茶などがこれまで注目されてきたが、生糸という東アジアの世界商品に着目したことで、近世から近代にいたる東アジア史を新視点からとらえなおすことも可能になるだろう。申請者の研究は、17世紀の台湾史を大きく越え、新たなグローバルヒストリーを展開する可能性を秘めている点で、大きな発展性をみることができる。

(3) 学校教育の実践への貢献

19世紀的な国民国家史を脱却し、グローバルヒストリーを指向する現在の高等学校の歴史教育(世界史探究・歴史総合)に対して、本研究が提示した17世紀東アジア海域史の見方と成果は、その具体的な方策と実例を数多く提示している点で、学校教育の実践に多大な貢献をすることが期待される。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は蔭木原洋の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。